法華懺悔滅罪

0931
87
貴重書
年
月
日
佛教大学蔵書
第 333421 号

法華院霊宝之縁起

過去七仏舎利

戒灌頂之水瓶

世尊之御袈裟

慈覚大師之御袈裟

来迎如来

智證大師御作之不動

舎利殿之内同塔

金色名号

高祖上人之御文

上宮太子之毗沙門

袖守之名号

上人之星数珠

同御作之指蓮花

同九條袈裟

333421

是心上人所作之守佛

同所書之弘法経

同三衣一鉢

善光寺如来板木

佛立恵照国師之所袈裟

已上十八種

已去七佛舎利塔をおがむ事

塔よりいたく舎利とりて四方の如来

也涅槃経よりいたく若人塔に供養如

来若人塔に供養舎利二人功徳平等にて

無異所得福聚量等遍七佛の舎利

とりて物留弥佛物那含佛迦葉佛釈迦

佛と塔をおがむしるべし也それらをみて

天竺大唐の祖師代々宗旨おがむなり

こゝに塔敬八唐の時道遂和尚西天の

はを塔敬大師よりつけうけつゆゑ七

仏の舎利瓶灌頂の多瓶世尊のみけさ

をさゝげたゝしたる大師うやまひうけ

てあを器よつゝゝくゝゝおい

器異してちりてゝく塔焼す則

きてあつてはをいろめたまふ摩
騰法蘭漢土よりきたりし日舍利
よのうりてひろ日輪をうたひ正宮
大和国に生せてときなに舍利
をふりて白毫佛とあらはれ給
に舍利とりてあまた白蓮の舍利
和州にあり正宮大なるはを日域に

いろめ給数大師正はをこれ州につたふ
と又これ舍利の形験也大なるの正はと
りて天王寺のうりのうりあり
又いたく釈迦如来摂法輪所白毫相光
東門中心に仏舍利をあしてこれ仏
心をおこはらん釈迦如来大なる是
のおとりん式仏をらいしあるい

四はをきてあらひい僧をくやうすると
こうするこれさくさくせいの
そうりんなり 一金りきかこ
ちんのとこうするこうさくらくとれそう
りんゆんよあこうりゆんよ法家
のはみる僧古門よきすこれ仏法を
ひろしたなのの金言也ゆうくを
一切の衆生をやくそ夢幻の世務をけ
をしてすんくくく永劫のあくをとり心
をしり人仏舎利を礼し六字の名号
をとるこにをのくく現世安穏後生善
所をうこひるきりの也

戒灌頂水瓶之事

偈よいたく灌頂のくくいとりん法界地

の位也 摩訶陀国より地位を建立するに四の
方国也 仁王五十一位 瓔珞八十二位
華厳経四十一位 大品四十二位 楞厳
八十七位也 法華経地の位 地の位
地の位百百万億紙幼の功徳を修し一
切法解脱の門 金剛台より位する
時如来の法身を法華紙に書いき

ふうきたるゆへ 灌頂地と云也
世尊如在の時 四華紙に書
わたるゆへ 法華経を華とのたれ
唯仏与仏のお位也 ちりし浄土宗の
もとゆへ 中ゆへの法華 ゆへ百万億紙
の修行 よりをよんす 如来の法身を
経文 一念 ふうきたるゆへ

性生礼讃よいたく好後心為法為頂と
悔るのくてんよしよりあり人為
まのはあをつくんとをつせくすん
くく為業よ仏をらり意業よ
性生を為ひ口業よ南無阿弥陀仏と
をもつへしよ一念よをいて其取切仏僧
紙の墨の罪をけそき好よ覚基よ

のりをしら脳切の為よあるすや
観仏三昧よいたく色を空王仏眉間
白毫お好後為礼敬滅罪今仏我今
礼好後亦為後如是と観仏よいたく於内
器と有一炎紙と則れ唯仏与仏のさ
ん灌頂の為やりゆ人よ天台の頂地
よ意紙を浄土を門よつふれりこと

ゑいさんをしてゐいさんらやうのはい
これを僧用せてゐはるや
世俗の袈裟の事
僧よいたゝく仏衣といったはそのそ
二十めてゝのけさや今時の僧衣よい
ゐていめてゝせてゝめてゝてゝてゝて
ゐるや二十めてゝといったん二十めれ通
と表するやたゝし別儀ありそれをんゐ
といったん衣をのつゝひゝくゝゆへよ
ゐ像法を如すこれ法家の作法れ
法のゐるや我家よいこを生といるや
たゝし出家の人己身れ好良嗜んの
作法の通ゐよりもゝへゝすといるを
宗派用軍や作法家のそゐいさんのいく

極楽にゐるがごとくすして三も十万億刹
のかなたの人は好後に已心を淳くして
ふるも一座一花臺のかたらを現ずと
いふ大乗よいたく専求淨土仏法
をもとむるはまことにしたがへ
ばまことにしたがへ我本願
地以念心へ生思今說此男女持念仏人
故說淨土と一切の天生じやうじんよ
いんとをりせたたゝ一向よ念仏をへて
り人心よ念仏すときんん二十
ゝてうのけさをかうろ如来のくらいや
かうゆよ涅槃妙よいたく仏性をあ
大行大行ん大行ん帰是如来と廬心師
のいたくのろくのこまいそのあ衆生

如是とも功たくすみやかに会
をさきとすこゝろ大師のいたく
自余元り難仏是善為代今仏全
相代校已心三種の灵言とゝのえ仏は
他授の法教なり他教顕の門の為
く如来の口はとゝのえ忍いきんよつふ
如来の口は心とゝのえこれ灵心やこれ
法宝の本心やとゝのゝ別ゝゆへ
極式天王をはじめ奉てまゝの代ゝの
帝法宝の高僧みな国家の口はをゝ
しゝたまふ三ゝに如来の口は他教の
最愛仏華院はゝゝゝゝゝゝゝゝ恩大
師のいたく未は百年金剛恵滅度
一教利他偏情に南今い如来の口は仏華

院よつゝ則是天正浄土也法家のな
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ人〳〵ゝ事をはめて
きりゝ五家武家〳〵ゝ浄土宗
よきゝしたまつゝの法師とゝりた
法花院度い法華宗二世とゝりそんて
知識ゝ勅号をたゝりて法主恵照
国師とゝやきいたまつゝ代義天下よ

ゝ重ゝとゝ〳〵て今時の世人やゝもす
きた我きんの仏をゝりく法華の正脈を
そねゝ者ゝ寺をゝそんゝれめゝ法院
の正はをあさゝしくこれあゝ申ゝとや
いんをゝゝなゝとやいんやゝそゝよ
をして浄土宗の文をみるゝれ法華院
ゝゝほゝまゝも

慈覺大師御袈裟し事

御ようい、たく慈覺入唐の時五臺山よりいてゝ御身の文殊を乳すゝのとき文殊菩薩慈覺大師よつけゝるゝて

ゝ一切衆生をさいとせんとゝりせしすゝ〳〵く法花所護念經をさゝたんを〳〵とゝりするゝ法花經

ゝひよりのけさをさゝけゝるゝ大師

えんきしゝるゝひやそきてゝの紙よ

りやゝやくの日ぬのあとよりゝ法花

時二日八字此文をゝ乳ゝすゝ大師の

心中不平也二ゝひ入唐せしゝよ

ゝす西ゝよきせいゝてのゝるゝて

南無至心歸命頂禮乃至法佛僧ゝく

にょらい
如来の大慈大悲をのりて八字の文
をさしてこれを一心専念帰命
しまつりて時うきうの那やこそ
如来いかやうまみんしうに
四方のめぐはたらのうへは
たまひし成就如是功徳荘厳の文をつけ
うへんるき陰のをそれをも
如来如是功徳荘厳とひくく大師はの
のたまをうらしうやまりて如来よ
まうしてまうさく行くく事世
生さいとのためふけさのこにらいえん
やうまうしまうせとおんしうへする
うけさのうへふうつうたまふけさと
りたえ文殊うしきさてんのけさも

その時は如来とりたて一寸八分程
するつこれ高如堂の賀みけん白
毫光うらよりうかさめたまつる也
けさ僧華院よつつ義とりたて
三井寺の見んら人僧古門よりきた
る時真如堂より申てすつ
今体したまつあひふ年齢こけ
ものまひうる老僧と弟子の修りん
と僧古門を問答しるる
見ん人これをうりとて弟子よて
むあつきみをらんて二僧の高名を
うらんとすまた老僧やて堂内
よりしきりまふ也修
りえいのかふうたる

これをあんずるに二尊大悲の説教なり
ゆえは帰命本願とあるがゆえに
摂受するときもまた摂取
のはたらきあり　これを参ずるに先
西要抄にあるがごとく又一巻抄自製と書
えて又あるお逆抄とあつけ三部の
ものなりきといえども善知識の伝授なり

此事をこうしてこけさをつくるべきなり
これこれ世こそりてみる体古門よ
きに者賊をくをこれのはをこうと
ひたりするこれ二仏の加力逆ん
うき是ん上人の化導なり
不動明王くく事
偽よいたくく此明王とりん智慧大師の

さく是ん上人ひさうの後り佛号
是ん上人いうれいをいまきをの
てたかくやうとたりうるのをれば
をんの御事今は利根たる児二人
きしくて出家をあらはすゆえり
これをあるふたりい是ん上人廿二歳の
時大病をえすてよ命あうんとし
うるの時に児ゆをふきせいけて
のうちよ教書をこめくいてく今これ
是ん上人とりたえ天下せ双の善知識
世に導師たり移りてを我上人の命
ふうんと会すまえん上人いはをにけん
きをえたまひ児いをや病のゆえにて
をれをすてをかして死のすてい家と

きしあんぬこんいしるすきかちを
いとき痛哭して慟すとゝ公をしか
ふりてそよせんなるをかちの母を
ねもこうまつ時行つゝのちふちいさ
き形書ありこれをんこうまんゆ遠
四の形書也ねもこちいくこ井寺を
いく専修念仏門よへ四のちこいを
そこちいこうまふこんおゝの時一ゝの高
ととゝくををこりてこんをそもんと
することちよやうかのねよこんをく
をのこをきこうまふこれ奇よいたく
思いこちこのいこうすくこも
こゝしのようすをあけこうて高と
をびこんをくをこんてゆこのこふて

ひとりの智慧大師いこれを動ぜ
化身也
来迎如来
僧よいとくしゃ如来恵心僧都の御番
也恵心の弟子和州又一安部の正親町
法印氏男をもせんと為し観音
いのり一生懸命の口ばらよりと
夢ありて母に成ふ誕して子も母やむ
とこしたなしゃ児七歳の時又やまい
のゆふふすてよ合おてんとする
時児をちつけるふるをとりてい
くのとりしゃせいまんの滅亡の
石宝のたいしゃ我いすてよ

ときゆうしをけすとしかるに又ゆい
うんをわすれてすなわちふきあげ
となりちをのうをかきすんすく
又りをしをうへしとこれをさいこの
をたすけすくたちおんぬ四ふ又ふ
をうんまらして毎年まいおちて
ゐこちよ仏をらしく移りてい観世音
かさりの行基ぎょうをもりてわをせんち
しきとすうゐし又のをしをうへ
りをの身となしうゐときおんすち
ちこれをあれたちをれちをいえ
の恵僧正やををの四よてちゐ
かをきのうををもりてすをちこ
僧正よりやしけすれいをの水なり

僧正のいとく大業ろんとのこゝろい者
ふゝやゝをろんせをちこれいたくこゝ
たむやくのてゝするゝ僧正ゐをとひく
姓名をこゝゐするこゝ母のかゝ人後をを
つゝてのゐるゝ世ちこゝをとんみて
たゝ人よゝすこゝろくいゐるよのこん
をゝゝゝ母これをきてゐるゝめたゝす

こゝひてつゝゝゝゝゝせめちこゝむこゝ
ていたくゐこゝゝけたゝといをを
父のゆいこんををむくゝすこゝるくこゝ
こんよゝゝゝすくゝすをゐをを
ちこのゐををみゝきこゝゝゝゝ者きゝ
かくたゝをきいめ父のこゝひをこゝ世
こゐをこゝゝゝゝゝゝゝゝの身をたゝ

ゐんの母いゐいめんゝ（しらく
ゝ）ゆかりへとひあり迷たなんさ
のをりちをゆのゆり一字をすへ
んゐ字をけちちをあるふらしく
けやさ三位をゝ母をいさんゆゑひ
をきたりゝゝゝとゐふらして別
賢せしめ恵心房とゐつくをれち

村上天皇の御世天暦八年六月十日
せいりやうてんをして御八講あり碩学
有智の僧高僧あゝ御坐のをれ中ふ
恵心房とゝいふゐんゐつくりして
殿こうをんゐのしもをれをいそて
ゐさうをんきりゝてうをんしき金銀を
ちりためこうゐれゆりろよすいやゝの

高ををうりくゝかゝさふ
ゝそかゝいゆゑにこゝろをたゝをよ
ゝすゝしてゝゝ高せんの重閑かゝ
たゝよをひて一代高ゝけゝ高ゝ
の母一千二百四十人の大ゝんの
中ふあんゝんゝの導師ゝして
その座よりゝかゝよせかりんとゝた

ゝゝあゝゝゝゝもゝれよゝゝゝゆゝゝゝき
高ゝをゝのゝゝゝかゝゝのゝんせゝも
ゝれよゝゝゝゆゝゝゝんきゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝんきゝくゝゝ七重ゝゝゝゝゝを
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゐはうあひたよりろくしたこと信仰の
門座よりゑゝ恵心の信仰とのゐゐうり
恵恵信心をしめしてきろうこゐ
人の為ときてもろ心のゐゐ末
代のしき焼とゑゝくゐろひゐゐうも
やて信仰ゐ門ゑをあそんされ七歳ゐ
門長ふそ人母のみりしをろうゐ

その門よりくゐゐ恵心ゑ生れ
人身をうけ父れの道をゑそこれ当て
たゐゐ父母の書鳳や七歳の時ゑんあひ
の家をいて台嶺よりろくりろ為きや
ゐくたゐときゐめ一天の事ふそゐ迷そ
きろゐん時たいゐんあゑしとの門やく
そくやゐ也事ふりてゐるゑんしと

書(つき)とめうるゆへ母いしゆをたれまし
ろうひのみてをりよりてのゐ
てりとりせいゆまゐろしこ
ゐうきせをそうへまんゐをあま
りれ一分(ぶん)のきりゐきゐりて
えんせをうけうそきうんとおんは
ゆゐをえしれくりうやたいゐんを
これうりへしゆ事よいをゐすをの
ゐりするうりうひいこゐ歌りこ
りをせた信れのゐゐりゐ母い
つねの女(にょ)よあすゐをにりそえ
ゐりをあらうひくゆをうを
ゆとゐをいよりたいゐんゐ信仰
第二番の時あんきやのすをとゐり

ゆうさとをけていそきこゑつくやう
やく和州よりはるかに母こせんの
つつしみをさしけてあらやはほ
信仏をえつけそきろうてやう
老母のけろいはりいつくのりみ
たい事也これへあんやうのあまれいつくや
とゝ信仏いをそいそきこゑい母のゝ
まよりこゑをあまのいとく老母へ
今こゝろの外よりこの家とゝのふ
きしたまふとゝいもあんをみさのこゝ
信仏へたりをおきん高をけそりんて
梵天帝尺天王天王そうして日光菩
中大師の御紙十方浄土の法仏かさゑ
きせいしてのこゑつく我七歳の時ゝ

今はいとうきそ作者きやうふを
やつしこの今たしめそ母をえそま
ほうとしをとしこの母いさしてしるき
すそ也作りくそ所時うとしを
を五世のすをとえこそきそんと
かんこをとときていのうこの母をうら
きそせいしこの母母いんありて
うこひこの母つてかうたしこの時
母のこの母こ七歳のこの時わこをこそま
ほうこ今たしめそかんせしうそ此ゆえ
いんとかふ一切者しやうの大尊師と
をかかんりれめやこそ今れをすめの母
まんやそ極楽浄土をしてなくさん
をいをとそんとのこの母いかこの者こを今れ

ト云人こゝ四さゝく三位の門跡を
ゐるゝ時し年七十のみて大往生をとけ
給ふ其時の門跡をうつしをき
たてまつこの御堂り其代のくも
今体ト云をひてゐるゝすゝらいかり
をゐるゝ大往生をとゝ（きや
金剛寺号し事

僧よいくしゝ名号とゝつゝ高祖法室
ゝ人の門弟号をひてゐるゝいなき
名号也勢観房念仏ゝの時し
名号ゝり光明をたるゝ四つを熊谷
これをゐるゝ也ゝるふ名号ゝり光明を
たるゝ四つ号とゝつゝゝ人の四つ
義大てゝのゝゝ術のゝみなく

あのかふ所なし　男女のめいたいも
あやかり　六字にてくしこう　ちのくさく
ゆ口腐の一切よるあるとうあり　あ弓
とうてこれ仏所や　無名　あ弓よ
んをけついようとひして　をんとう
ふそうをあらわすと人をのかせば
うをとを人へうねそもうあれば

をん之御文

けうのうをわすと人をのかせるうん
ちうしへんさうあるうをあうしき
いううねよん像土宗のんをんをしひ
うをす　往生しん事ん人よいうす
れくもうをせんをすうるとはう
うえてせよたうしのき無人うて

南無阿弥陀仏と申す人〻も一念にて
をしやうは生をそけんなりけり
ふ弘法大師は生をしそこなひ
きそれのはゝ此あきて来世も
仏申してかゝるたくせひよりる
をく〻くれはゝあくそは生〻
ちやうりつけく〻法空一紙の
なをひ
なをたひ〻くく〻念れたなりの
そをたちたくをつゝふ弘人ふて
すゝけをひをくるをくゝらをて
しんをん人あるこ
又せいをんたゝかをてさつけゝう
をるのあをあをりふはゝさふあをて
をゝはゝをけうをはゝをれへつを

そもかゝさうのもゝじきうゑけ
るりんたちふつとふすゝすと
れんのものをさんてうしやくそ
うんおきたちつゝてんいそきん
れんこれもけゝのあきかゝおう
ゝてんこうきゝあつれんりゝふ
ゐをかきてまゝせんわきめうこん

真如堂の如来うゑけゝふんう
てんうんゝきふそゝくゝてゝそく
ひんきてんりゝすこのきさゝせん
京と国とりゝとゝやくんほゝふそんう
判をくんてさゝせんゑ筆うてん
のんゝとうもけゝかりゝゝ師弟の
けいやくうてんゝかゝみんてゐゝこ

建永元年正月朔日　源空　七十御判

熊谷入道殿

ゆしんしきれんのもんせいをんはう
ぶきやうのつんをすをすみやうを
んんとて　ゆきりいさういんかを
てきつく（きりりょうとすいをう
をんんかんものをひてとわひ
ひふんきれんこのをしくをしくうん
きたうとてうんうすんあること
所自業ものたいよりすすをう
をきうゆんかのこをいつんを
御上宗也極のあんをんや序正流通
のはもんあるやけりりんんよりは
みりてい序分れくもりん

えんえんとしてい宗旨之世をん
はらうおろかにして流通之世
りうのほとわきと人をのおせうるろん
ろうしへん　とそれうるい法之の
はるきえんありて情をるてをを
ろうしうるるや観世よいく
即便微笑これいたいの情をろ
うしうるるや大師のいく法鐘し
をとえんをるすくをきて
まさふるう大聖の点をうれたまて
うるす情をきうてはふきた
きえんとうう
をあうしきうるねみん法之宗の
うえんせうしるるまくやうやしん

こゝは人にはへらしすん
とせきゝ果ては弘誓広大の器や
善人も凡人もてことごとく往生
をとぐるこれ善根菩薩の法門や凡人
は般舟経にいはく三世諸仏念仏三昧
成等正覚とて凡人は三世諸仏もみな
浄土宗や又大経には十方衆生と

それ〳〵果ては凡人にかぎらず諸仏もしと
一切の衆生もみな念仏をもて
成仏なり
これ〳〵　とそれ〳〵果ては十方の
衆生やうたちけしめのこれはさいせ
の一切衆生やうかきりてのこれをとん
たまはりたいめう〳〵此衆生やうや

たゞ世にすぐれたるこゝろえてせよ
あくひのきあくゐんたりとも
南無阿弥陀佛とゝなへいまん一念をも
けつちやくは生をとけんたり
とゝれこれ大事の仏法や一宗
あん起りをときこれ大法をいて
其有得聞彼佛名号歓喜踊躍の至
一念當知此人為得大利則是具足无上
功德之
はりふ別ゝこゝろえん人は生をこゝろ
とゝれこれ難遇難のあんを
ゐこゝろ法のちしきをもとへ
きちくゝしては生死みちをしらふ
ありしたがつてなるこれ小智大愚

のゆへ一家の正脈をおゐのゆへ
に僧を家にてこゝろいろ人のはなし
ゆりをしてねたひ一代のはをとゝ
学すると一文字のくゝん学
ふるてたつたの世智ゆへ
よるてて智ゆへこゝろを
せすてゝ一向よ会れすん

又それのはゝはおきて系ゆ行
ゆゝかれたくゝせひよるとくゝ
とゝゝこゝろ一念のゝんいく
ていゝのせんゝやきせるゆへ
ゝいむやゝゝゝゝくるをゝくで
法室ゝ一紙のゝいゝをたひゝくは
とゝゝこゝゝゆゝに分けも

よろこびてありがたきことはなり
いと一ねんひさしくすゑながき世まで
ちらせてもらしめすやそなくいて
ちんいの人をんなをちらすのなんや
こんていたく金ぬ金ぬとと金ぬ
悠なうちんい金ぬまりたなめ
をちらくこれちぬのこめり

ちらいてちらちんいをまえつよい
遠よのりやゆ瑜伽論よいたく意
業善根生多功德こ ちるかけしぬ
あきをいきしめうをかいこ人のを
くすあくんきやくしをを性生を
うとちんてお罪をもおうさを生
あくいんをちすいこんやを人をて

真如堂の如来をうつしたてまつる
とはいふ人ありしかは如来よりの時
雷電の音しやうとさいとせんとなり
めすゆへにはしることをうけ給
如来御師匠とそうたれたる御
ちつのたとへにはくとも仏教の
あんかきりにあらはしきに
仏法世法仏法すくれたる
これ法師の仏教大悲
くの如来弘化純化の法師
とつくく覚をとる人とも
さりをもてひきこ開化
する正直修善をとへる
人拘戒精進の人へとくを

破戒罪根のわるい人今生で三界
よりはらすちからに妙法蓮華経の行
者となった法照禪師五會法事讃
よいくく彼佛因中立弘誓願名念我
總迎來不簡貧窮將富貴不簡下賤
與高貴不簡多聞持淨戒不簡破戒
罪根深但使迴心多念佛能令滅罪
成金色いかゑ又一枚法華経のよ
おそいちくてこれ人の大慈大悲
也無益一人のためのこゝろあるす玉
代の法ゑ生ゑやそかしめんうため
也ゆゑいろんきもゆるゑ邪のこゝろ
をあらすも也
三宮方の毗沙門之事

偖よいとくせひちやのんといふたる降
魔の時うちとふしてきかたをかゝえて
うるつを降魔といふたる仏を見
よひろめたもつ時りりやうるこけをあえ
うたあよしんをくいてゆ〜せいをりて
をゝゝたるこあんのりうるまゝこゝ
ひうるつをよたすけのそふるふくの
〜ふりるのされ棺のまよひくく
のうるてうるうるれ怪たりといふてき
てんるんのゝそかひをあゝてすゆまを今食
をもしよあゝす回くひをあゝそよ
とあゝすゝこうまゝれはつやくゝ者
ゝのあをうるりこうあゝゆまを
をゆまりくすゝとのうるくせうき

そひ〳〵をひ〳〵くうとくうてたるをか
〳〵そまうるをりやいかるをこるをと
うねりよをせんなるをやらたを
ひををそうるひ仏界笑をうをた
まひわををひ仏敵をかう〳〵せしう
よをひてい天主をといふたかんをえん
をう〳〵仏をひうめ一切為〳〵やうをさい
をせをちひうるへやををけへ数
をるをかをるうなをひりやうちんへを
うををりををきをを一ををくををりや
ゆ〳〵せいあうひふけうりあうひせんちや
よいうるをを時りりやいは〳〵ををていく
ををひやう〳〵りのまるこふふせいもれせいを
をんゆうををりををきををあをせけうを

時ゆうやうるうや八まんたかうの
みたことをうけまきうるふる
時たるけものの人よつけうるてゆ八歳
の時うり相戒の方ゆ八たりやうん
めいの矢をいるよをすびうゆ
うんてうりうるりうる矢やうう
びをもつてあくまゆうての矢を

いうるへしとのうるつよりてする
うびを矢をはうまゆ八たびを矢すふて
とうてうるよりうるうてりや
うのうるうるするうる金をうるふ
必ふてうゆうへしゆ八形しよ
軟必ゆ八堪安たるよいりや人りんてて
ちむへしゆ者しやうの一つよれ性あゆ八

ゐんをもあらゆめ〳〵ゆゑんをたゞす
つねよりおけんをのりてきりてをこんと
をもへんしをていたく愚池の高しやう
りてうんをうをこんせんこゝんていたく
大師のたよりたく利剣即是般若号
一切経会罪障消滅ゑんせすく
ゝをこんすみんをもあらゆ自力をのり
をこんせさうゆんをもへんぬゑん法家てう
ゝをのはう門也
袖手傍観号〳〵事
他をいたくさしをかれ号をいつた高位高官
をこんの御事也義経法事ゝをもへんをあら
ゆ事をのそをつけうゝ長おうら
手をはらり法氏のうんまうをけ

天下をおさめしもこれは五号にいたる

星数珠く事

偈よいたくは星数珠といひて高祖師堂

こんこうふまちまて時月殿ト

ゆまいりのこれは十念をうけこの所

は数珠ひ見ゆをたるこの所に

こ星はたかゆ星数珠とをく

これ数珠といひて百八の行者の号とと

ゆ念珠とをうとこんこ我〻百八のこん

たをつこうて百八の行者をあらはし

別は偈あり

拾蓮花〻事

偈よいたくは拾蓮花といひて祖師堂

こんの所作や一世のあいたつはこれ

となりらくゆうの往生をして蓮花を
のらるゆえんそれ実因妙因果不
二也法中らいてまたも法よりを
由とこれ名くくの花也りるこれ因
果因妙の実行名自行人世間史花
因分業不因業するこれ自行果
のは門りは生を行るこ一人い仏自

南無阿弥陀仏と名るこれ仏果也
ゆえ観ぬよいく名生通情生活行道と
ゑん御名号しき
他よいくけさい高位位宝ゑ人のけ
けさ也れてゑんれ不の浄土れ法
ゑん分此回地たゑ部り他れ不
の浄土ゑんの心不也んもつる

きやうたんこくを観によつてりんもよつき
やうたんさんを観によつて大師の足に
いたく三万六千十万億暦是三観に
生人かくゆへに法界をちやくする
くらいや九識分の田地といつた大経
まいたく従如来生解せしめて大師の
人はいたく不覚湛へ如門ことあらんの

いたく妙夜後夜の時分へるまとをすく
ちらり也そふていたく此もきやうくへの
ゆくこゝろていたく不識
是心ことく身仏し事
我はいたく此身仏といつた是心ことく人の
所作一乃三礼の如来や是心ことく人の一世
罪作よたゆらく自ふや一心不乱に念仏し

爾ときんた光明をはなつ事
是ん人の命終後後世しる事
偈ないくしせんたいていつと一字をふの
つゆや一代はめ千金をけそのゆ
よ部して後世と一字をふよあそん
はうてゆい六方恒沙の諸仏護念
のつゆや

三衣一鉢し事
偈ないくしせを衣とそんと是ん人の
けけさをてう七てう五てうやそれ衣也
ちーやうの福田や仏衣を信よきうう
ゆいく仏戒をなりくはをひろ
り人一けん衣すときんと三世諸仏
同時よりうい爾ゆ人よ一ん衣

すまたんきうそくえよしやうそそうそ
三衣の系別伝あり一鉢とうと仏
仏を喫してうんうんの食をやしなふ
浄土論よいたく寶樂は味を味為食と
如来板木し事
仏よいたくは如来のたんきい是んらの
門さくや是んらん菩提寺まいり
うあり時門弟恵のつけあるふらって
たんきの如来をさくしうあり人仏
んよは如来をくきやうしり人仏んよ
菩提寺よは指せん三人のくさく等
みて異るし也生板雲らくひる
国師御器器し事
仏よいたくは門けさ八幡菩提院殿の門きたんや

可秘密灵宝之目録

授手印　　弘法　　開山御筆

懺悔之次第　　弘法　　同御筆

戒法相伝血脈　一巻

雲書

慈風大師之御筆

三部曼荼羅　　弘法　　開山御持仏

舍利塔　　角塔一粒之仏舍利四天在之

開山御影　　同御自筆

開山御筆之名号　　弘法

乱板木

聖教　　目録別立

祖師之御骨　并　代々之人々の骨

開師之宮内様数珠

牛玉を　円具玉　武拵

舎利鉢　大小

已上十五種

惣合る三十三種霊宝也

右の霊宝とゝのへた三間よりこゝいる

きよゝうゝや南院とゝのへ女道の

しやうかうとしやうみやく

ひけ浄土の心脉をとゝふらふゝて

その院にて申ゝて霊宝をさ

ゝんせ申ゝゆへ結西二院の寺と

ゝふきせんこれの人ゝきせちんや

西とゝよゝ北院とゝのへむき

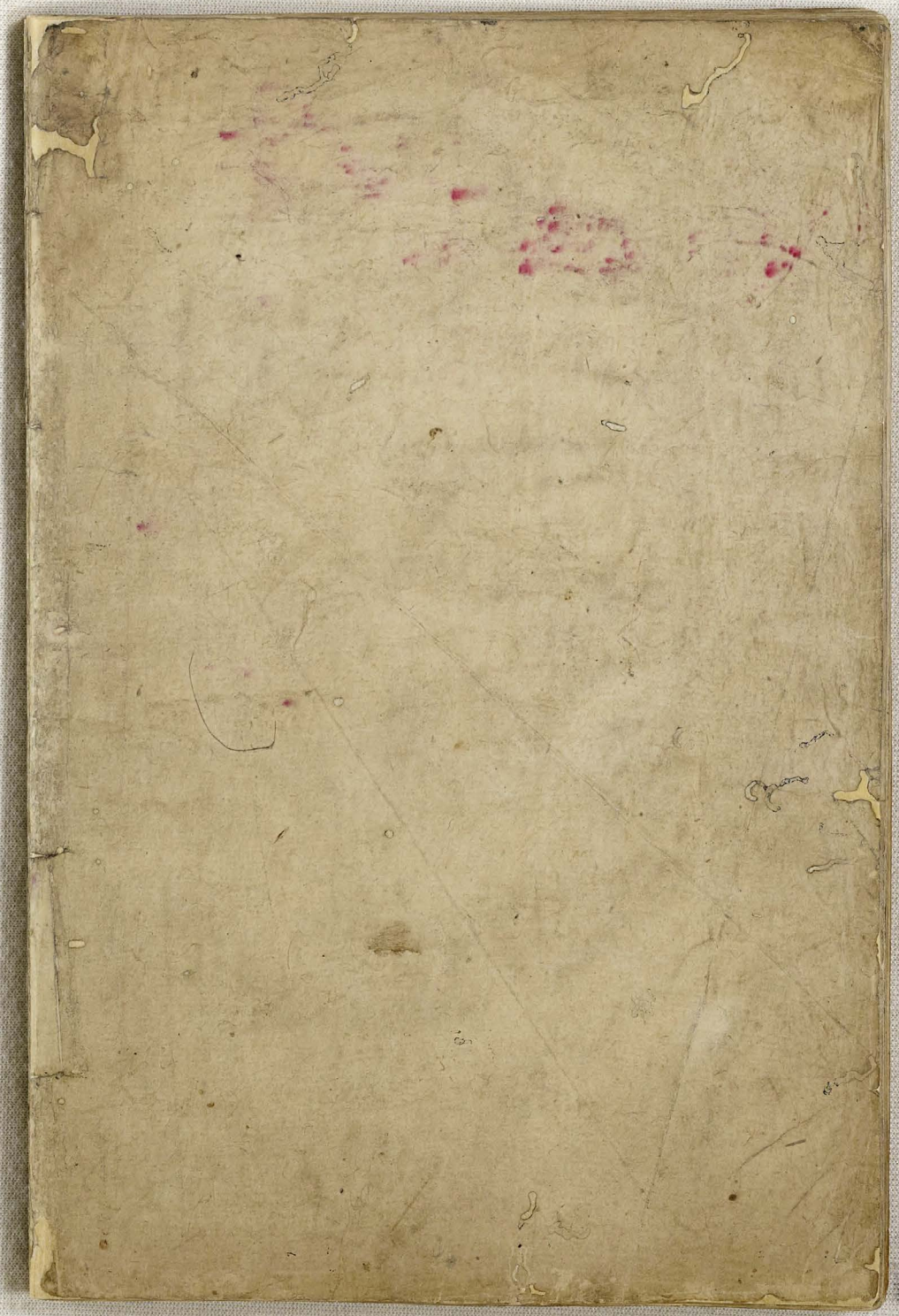
そこに浄業院や代宝西きゝふ

ねんぶすゝとゝ申ゝていけんの時そ

国師いらいのはけとゝ北とゝ住持とゝ信

とあひれいしてこれをたいけんあるべ
き事をたこふおきしろめもよけん
とのたまへ信元僧の封をつけて
禁中のけくふあつけをるべき
や今はたんきい国師けさてんの
旨をもつてはたんてこれをたます
とゝんとて身あやまりあるまうつ
ていあれはちよけ〳〵ひろとあるもも
文字をるるとなすてい元信の方
ひをふつてやこれ人のんまさい
拾ふりてはをたまあるい也

長福三年四月二十五日　比丘良秀

佛教大學所藏

333421